

磁気圏記 「EXOSからOPEN-J」

元 NEC 原 宏徳

この度、西田先生が瑞宝重光章を受けられ、「ジオテイル衛星の集い」にお誘い頂いた時、三つの記憶が長い歳月の深淵から蘇ってきました。

まず現れたのは、1985年、当時、GEOTAIL衛星はスペースシャトルからPAM-Dなるキックロケットモータで軌道投入される計画であったので、4月、NASAの皆さんと先生方が第一回の協議中、当時のNEC横浜事業場に来られ、更に12月には、西田、二宮、上杉の各先生とともに、NEC6名の技術者を率いてNASAの各センターを訪問し第二回の協議を行った時の光景でした（写真参照）。その各シーンの所々が今でもはっきりと目に浮かんでくるのです。

二つ目は1981年、当時はハレーすい星探査のプロジェクトに取り掛かって間もないころ課題山積のプロジェクトに振り回され必死に飛び回っていたにもかかわらず、一陣の涼風のように「OPEN-J」と云う言葉が現れてきました。振り返れば、それまでの科学衛星の中で私が最も責任を持ち、そして最も愛したEXOS-B（じきけん）、その領域の計画ではないか、これもやってみたい、そう感じたのが鮮明に思い出されました。

三つ目は1987年、EXOS-D、OPEN-J計画の内の重要な一機、西田先生、鶴田先生始め大勢の先生方に変なご心配をおかけした輸入ICのリード仕上げのトラブル、当時、信頼性保証、信頼性管理万能の風潮が支配的な中、技術判断がギリギリまで試された案件でした。相手の技術者と徹底した議論、その結果を信頼しての再処理、裏付けの試験、それでGOをかけて下さった先生方の判断、今でも目に浮かびます。

EXOS-Dは無事打ち上げられミッション達成。このころから私は宇宙ステーション計画の方に専念、後輩たちの手で完成したジオテイル衛星はデルタロケットで無事打ち上げられたのですね。その成果がこうして評価された、こんなうれしいことはありません。



（1985年12月、ケネディスペースセンターにて）